

く曳光弾のようなものだとすると、それまで散発状態だった銃弾音がピタッと止まる。私は安全地帯にしてくれたんだと直ちに覚えた。そしてやさしくさとすように静かに腰をおろして休んでおれ！と手振り身振りで、教えてくれた。前線の日本兵もこうなんだろうかとつくづく考えさせられた。見れば機関銃座をがちり据え付け銃口は私達が上って来た方向に向いているのではないか。一瞬ぞくぞくした。万一引金が引かれていたら私達八人は一卷の終わりだった。射撃しなかったのは防空帽をかぶった背負児が背中にいたからだ、兵士達は笑いをまじえて好意を示してくれた。若し英語が話せれば多少様子もわかり、用が足りるのではないかと思い、私、「キャンセルニュースピークイングリッシュ」話しかけたが手を横に振って通じない。手ぶり身振りで話したことは。私「私は此の附近に住んでいる住民だが、突然の進撃にあい豊原方面に逃げて行くところを逮捕されたのだ。」兵「此の附近には住民が殆ど家の中にいないようだがなぜか。」私「急の進撃を受けたので日本人は殆ど防空壕の中にかくれているんだらう。」兵「何か皆に伝える方法

はないか。」私「私が各戸の防空壕の人々を呼び出す役をする。安全を保証してくれ。」兵「よろしい。たのむ！」

私の住宅附近、真岡第四校在学学生住居の本泊地域ゆえ、殆ど知りつくしているので、呼び集めるに、手間暇はかからない。先ず近親の蝦名家の壕へ皆出てこい。何の心配もない。安全を守ってくれる。集まる者応援して呼びに行く者。束の間に殆ど残る者なくらい、ニコニコした安堵の顔色に笑みを浮かべて集結。十時頃にもなったらうか。婦人と子供は一応家に帰され十五、六歳以上の男子は真岡築港の塩倉庫に収容されることになった。

## 五十四年目の追憶

北海道 紺野 敏夫

引揚当時は終戦直後の八月二十日夜十二時出船。十九歳の長男いわく万一のときは親子一緒と決心して乗船

翌日稚内港を目の前にして浅瀬に座礁。日は暮れるし、対岸から兵隊さんが小船で救援にきて二、三人は軍の車で稚内に送られ、行程六十里とか、臨月のお腹をしている家内、病弱な長男、小さな子供、半分はやけとなり、外の人もおり船に残り、満潮のとき、船首のドラム缶（油入り）を縄で結び海に浮かして無事深夜十二時稚内港に着く。家内が子供達のためにと唯一の荷物、毛布の風呂敷包がその時点で紛失してしまった。

やっと引揚て来たが私達夫婦は樺太生まれの樺太育ち。大泊以外は知りません。二男は学徒奉仕に狩り出されていたが子供を手元呼び寄せ、豊原駅の爆撃の煙を見て、密航船の人となったことを思い出す、肝心の荷物は持てず、着の身着のまま、食料の求め易い所をと羊蹄山麓に向かいました。

その胸中東西もわからない土地、身重の家内を含め総数十一人、そのときの自分は他の人の苦痛にも勝る悲壮なものでした。今になり良くぞ生きてきたと感無量。夜通し駅に立って、俱知安迄の切符を求め必死の覚悟で乗りました。途中話す人もなくおりました。昔の軽川駅よ

り乗り合わせし風采の上がらぬ初老の人に声をかけられたのがきっかけで、喜茂別村に行くことになりました。

その恩人は喜茂別村の相川での農家人。地獄に仏、一軒建ではあるが一間の寝室ではタタミ表のないタタミの上に真中に炬燵を置き、皮のない綿ばかりの布団、子供たちは着の身のままもぐり込むようにして寝ておりました。この人はあとになっても食糧のいもや南瓜唐きびを無料で私に恵んでくれました。

十三日女子を無事に産み、病弱であった長男が栄養失調も重なり十七日に急死。その内雨漏りのひどい、一軒借家にはいりましたが、翌年五月五女が伊達の日赤医院で急性脳膜炎と診断され、金もなし。死んで行くのを家内と二人でせめてもと、両手をにぎってやるだけでした。

翌年商業共同組合に就職した二男が腸結核で札幌みすまいの病院に八か月ばかり入院。回復の望みなく喜茂別の厚生病院の一室で親子対話をしながら息を引き取りました。その時家内は末子、宏を出産三日目で病院に駆け込んで来ましたが、間にあいませんでした。生活もまま

ならぬのに長男次男五女が死亡、自分より家内はどんなにか悲しかったろう。別段寝こむ様子もなく、敢然と立ち上がってくれました。間もなく三男は鉄道に籍を置くようになりましたが、知人に方角が悪いと申され炭鉱で働くことになり、隣人の妹さんが嫁いだ天別炭鉱に一度は健康面で不採用となりましたが、再度行って漸く乙種として採用されました。仕事の面でのけがで病院に行っても、病気などで行ったことは一度もありません。

就職一か月もたらず喜茂別の大火に見舞われ、住み場所を転々としている家族を心配、炭鉱の労組の室長泉氏の骨折りで家屋が当たり一家炭鉱生活にはいりました。喜茂別は食糧欠配がつづき一週間の麦粉を受け炭鉱の米の配給所の好意で前借りに前借りでいもや、南瓜・大根と造り、食べられると聞けばなんでも食の足しにしました。

一か月の給料は食べるだけで消えてなお足りません。

三男、四男も鉱外ながら働けるようになり一息ついた折、炭鉱縮小のあおりで三男は札幌に職探し四男も幾春別の炭鉱へ。やむなく自分は残りました。最初の三年間

ぐらはいいつかは炭鉱をやめようと思いましたが、家族の事を思って働くうち五年が過ぎ、あきらめもあったが苦にならず約二十年位働きました。残る子供等も職にいたり結婚したり今では炭鉱様様です。少額ではあるが年金もあり長女の元で妻と二人八十四歳あと幾年生きられるやら、満州引揚者などご苦労なされた人も数あることですが、人それぞれの苦労は軽重はあり精神的に感じることは大変でありましょう。